



うだるような暑さが続いていますね。6月号に載せた紫陽花の季節もすっかり終わりました。紫陽花は最盛期を過ぎると残念な感じ…とこれまでは思っていました。しかし今年初めて「アンティーク紫陽花」というものを知り、夏の暑さに退色した紫陽花の花も素敵に見えるようになりました。ことばの力はすごいですね。

## 言語聴覚士と臨床実習

8月の第2週から6週間、言語聴覚療法学を専攻する大学4年生がおぎはら耳鼻咽喉科に臨床実習を受けにやってきます。言語聴覚療法学を専攻すると1年次に基礎医学などを学びます。2年次にはSTとしての専門科目が少しずつ加わります。3年次になると大学内での実習も含め、臨床に直結するような言語発達障害学、構音障害学、聴覚障害学などの科目を大量に受講します。そしていよいよ4年次になると2つの施設で臨床実習を受けることとなります。この臨床実習で得られる単位数は12単位です。座学1科目(半年)で取得できる単位が2~3単位ということを見ると怖ろしいウェートですね。

さて、臨床実習で何をするか、ものすごく大雑把に説明します。

例えばお子さんに対するST指導の場合では、

- ◆ STの臨床場面を見学する
  - ◆ STが用意した課題の目的を考える
  - ◆ 課題に対するお子さんの反応を観察する
  - ◆ 自分が指導を行うなら、どのような課題を用意するか考える
  - ◆ STの指導のもと、実際にお子さんに対して検査や課題の一部を行う
- といったこととなります。学生が見学場面でガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリ・・・と何か一生懸命書いているのを見かけると思います。学生は日誌とレポートを書くというタスクがあるため、細かく細かくSTの発話やお子さんの反応を記録しているのです。ただ、私は記録に夢中になるより、顔を上げてお子さんの表情や視線に注目して欲しいな、と考えています。そこで、記録に注力しなくて済むよう、ビデオ撮影をお願いする場合があります。もちろん視聴はクリニック内だけに限り、個人情報の保護には細心の注意を払います。



私も20数年、北里東病院、オリブ園(秋田)、ひまわり学園(埼玉)の3カ所で臨床実習を受けました。実習では座学で得た知識がこのように使われるのね、と臨床と結びつく一方、お子さんの予期しない行動に教科書とは違うよね、と思い知らされる日々でした。特に秋田での6週間は自宅から遠く離れた地での実習であり、当時はスマホどころか携帯も有るような無いような状態で、実習以外の世界とは切り離される環境でした。どっぷり実習と秋田での生活に浸った日々は、私のSTとしての臨床への向き合い方の大きな部分を形成したのではないかと考えています。それほど臨床実習は重要なものだと私は考えています。なので、指導者として臨床実習生を受け入れる私も重責を果たすべく6週間を過ごしたいと思います。

学生にとっては補聴器や人工内耳を装着している大人の方とおはなしをさせていただくこと、お子さんに絵本を読み聞かせること、おもちゃで遊ぶこと、お子さんの家庭での様子を親御さんに質問することなども大変勉強になります。緊張してガチガチかもしれませんが、どうぞご協力をお願いいたします。

## 昭和のはなし 🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻

「昭和レトロ」「昭和エモい!」といったことばを目にする度に「半世紀以上続いた“昭和”ってひとくくりにできるほど単純な時代じゃないよね」と思っていました。私が生きた昭和は最後の10年ちょっとなのですが、SNSで「#昭和レトロ」と検索すると、お花や果物の絵が描いてあるガラスのコップや赤ちゃんの形をしたおきあがりこぼしなど、「ああ、うちにあった」というものから、これは見たことないなあと思うものまで本当にたくさんの「昭和レトロ」が出てきました。「昭和レトロ」はどうやら昭和30年代～40年代(1955年～1974年くらい)のことを指しているようです。まさに高度経済成長期の「昭和中期レトロ」ということですね。

さて、今号では昭和レトロのもっと前、初期の昭和を垣間見ることができ本をご紹介したいと思います。かこさとしさんの「未来のだるまちゃんへ」です。「子どもは、大人には及ばないかもしれないけれど、ひとりひとり、自分で考える力をちゃんと持っているし、ひょっとしたら大人以上にいろんなことを感じているものです。」というかこさんのことばには、子ども達への信頼の気持ちが溢れていると思います。おとなが用意した遊びが、“つまらなければ、ちゃんといなくなり、よければいて…”という子どもの姿は子ども相手に臨床



を行って私に心に留め、大切にすべきことと考えます。令和となり、エモいと言われている昭和ですが、「未来のだるまちゃんへ」を通し感じたのは、自分が知らなかった新鮮な昭和、懐かしい遊び、しかし根本的には変わらない人と人の関わりです。(井上理絵)

↑私のスマホの中に見つけた#昭和レトロ。「未来のだるまちゃんへ」はオギジビ文庫にあります!

## サとカとタ 🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻🌻

子どもたちは周囲の大人たちの話すことばを聞き、時にそれをまねて発しながら、徐々にことばを身につけていきます。しかし、ことばの習得過程には個人差が大きく、ことばの遅れや発音不明瞭の主訴で当院を受診される方も少なくありません。中でもサ行、カ行がタ行に置き換わっているお子さんによく出会い、毎週の練習に入ることが多くあります。

サ行は摩擦音といって、舌尖と歯ぐきでギリギリのすき間を作り、口の中に溜めた空気(呼気といいます)を急激にそのすき間を通して口外に送り出して発する語音です。舌尖の微細な運動が苦手な場合、ギリギリのすき間を保てず、舌尖と歯ぐきがピタッと閉鎖してタ行(時にはチャ行)が出てしまうのです。サ行は、多くの調査で習得時期の遅い語音であることが報告されています。皆さんもよく聞く幼い子どもの発音と感ずるのではないのでしょうか。

では、カ行はなぜタ行になってしまうのでしょうか。これはあくまで推論ですが、一つはカ行とタ行は両方とも破裂音であり聞こえ方がかなり似ていること、もう一つは、カ行は軟口蓋音(舌の奥と口の天井の奥の方で発する音)、タ行は歯茎音(舌尖と歯ぐきで発する音)であり、タ行の方が発音の動作を外から観察しやすいことが要因かもしれません。語音を聞き分ける力が未熟だった幼い頃、周囲の大人がよく見える発音動作に注意がいき、カ行もタ行と同じ動作で発するようになり、それが習慣として定着し残ったというわけです。

子どもたちの発音は、発音動作の基礎となる運動能力と大人の発する語音を聞き分ける能力、この両方の発達に支えられて徐々に整い、小学校低学年頃までに完成するのが一般的です。サ行は前者、カ行は後者の能力に関わると考えると、相談の多さにも納得がいきます。言語聴覚士が介入することで、少し早めに、できれば就学までにサ行、カ行が言えるようになるとういながら、それぞれのお子さんに合わせた練習方法をいろいろ工夫する毎日です。(鈴木恵子)